

# “私のターニングポイント～Oさんのケースを通して”

水仙福祉会 風の子そだち園

酒井 郁恵

## 1. 水仙福祉会 風の子そだち園

- ・大阪市西淀川区姫島にある生活介護事業所
- ・定員 50 名で、重度・最重度の利用者の方が主に利用している。
- ・大きく 4 つのグループに分かれており、私とOさんが所属していたグループには 15 人の利用者の方と 7 人の職員がいる。主に最重度の方の日中支援を行っている。

## 2. Oさんの紹介

- ・ 30 歳 女性
- ・ 療育手帳 A 判定
- ・ 就学前、淡路こども園へ通園。中学校卒業後、風の子そだち園へ通所。
- ・ 言葉での表現は難しく、「うん」「イヤ」という発語はあるが、イヤな時でも「イヤ」と言わずに「うん」と言ってしまうことも多い。笑ったり、眉間にしわを寄せるなどの表情や困った時、怒っている時に出す甲高い声、甘えたい時に出す「ピピピ・・・」などの嬉しそうな声など、声の大きさや高さに本人の思いが表れる。

## 3. Oさんと私の出会い

- ・ 2005 年 4 月、Oさんの担当になる。私が担当する前の 1 年間に担当が 3 人も変わったこともあり、人を試すことが多かった。当初、周りの職員からも母親からもこだわりが多く関わるのが難しいと言われていた。
- ・ 登園するとまず、うどんを作らせて食べ、食べ終わると部屋の隅からフロアを眺め、糸くずを見つけて担当に切らせたり、ペットボトルを見つけては中身を流させるなどのこだわりに付き合わされた。担当がどこまで付き合ってくれるのか、自分の気持ちを分かってもらえるのかを試していた。絶えず「キー」という甲高い声を出し、十分なコミュニケーションがとれなかった。

Oさんは人に甘えたいという思いは強く、落ち着いていると体を担当に寄せてきたり、頬を寄せるなどのスキンシップをしてほしがる。しかし、この頃は本当に気になるものが多く、なかなかゆっくりとスキンシップ的な関わりを持つことは難しかった。彼女も私も常に気を張って生活していた。一言で“こだわり”と言っても、私と彼女の間だけではなく、他の人を巻き込んでしまうようなことも少なくなかった。彼女がど

んなことを気にしていたかを以下に具体的に紹介する。

#### 4．Oさんのこだわり・・・

##### <室内>

- ・ ポットの柄や洋式トイレのふたを本人の思っている位置に戻す。
- ・ ペットボトルの中身（特にお茶）を見つけると全部流したり、量が少ない時には飲み干すこともあった。本人に伝えたいことがあるが分かってもらえないときは厨房までペットボトルを探しに行き中身を流そうとする。
- ・ サランラップを見つけると歯で食いちぎり、周りの職員に吹きかける。
- ・ 偏食の強い利用者の為に作られた食べ物を欲しがるので、本人の為に同じものを作るが食べない。それでも毎回要求し、応えないと奇声を発する。
- ・ 糸くずを切ったり、同じグループの職員や利用者の服に付いているタグを引きちぎろうとする。
- ・ 小さなゴミや髪の毛を拾ってはすぐにごみ箱に捨てる。
- ・ 缶運搬に行くトラックを嫌がり、トラックに缶を乗せると「キー」という大きな声を出して缶をトラックから降ろせと言う。そのトラックが出ていくと、帰ってくるまでの2～3時間、昼食も食べずに炎天下であっても雨が降っていても待ち続ける。トラックが帰ってきて缶が乗っていないことを確かめた後初めて室内に入る。
- ・ 鍋の中にカレーやシチューが残っているのを気にする。全部なくなると気が済まない。なくなるとは捨てようとする。毎日厨房に行き確かめていた。

##### <室外>

- ・ 落ちている空き缶を自分の決めたごみ箱に捨てに行く。散歩に出てもそのごみ箱との間を行きつ戻りつするため、目的地までたどり着かないことも多かった。
- ・ 1日に何度もジュースやお菓子を買に行きたがる。ジュースを買いふたを開けさせるものの、飲まずに捨てる。お菓子を買って必死になって食べきる。自分で食べられないときには無理やり職員に食べさせることもあった。また、買い物の際、自分の財布や小銭を嫌がり、「キー」という大きな声を出して「捨てて」と言ったり、自動販売機でジュースを買ってもおつりはとらせない。
- ・ 近くのコンビニでお菓子を6千円～8千円分買う日々が続くこともあった。（費用は園が負担していた）

ほぼ毎日これらのこだわりを繰り返しながら過ごしていた。何をしても何かを気にして、最初は外出する事さえ難しかった。部屋で過ごしていても、絶えず「キー」という大きな声を出していたので他の利用者に対する影響も大きかった。

## 5 . こだわりに付き合う

この仕事を始めて、最初に担当させてもらった。私は彼女に対して何をしてあげたらいいのか、どうしたらいいのかが分からず戸惑いながら関わっていた。ただ、こだわりに付き合うことしかできなかった。こだわりに付き合うことで本人との関わりの糸口を見出したいと思っていた。しかし、毎日同じことの繰り返りで、なかなか彼女との関係がうまくいかない日々が続けば続くほど、自分と他の職員を比較するようになった。他の職員と利用者の良い関係を見ては、私と彼女の関係を比べ、「どうしてああいう風な関係が私たちにはできないんだろう？」と落ち込んだ。それまで彼女を担当していた人がベテランの職員だったこともあり、「私には経験がないからわからないのではないかな？もっと経験のある人が彼女の担当なら彼女はこんなことをしないのではないかな？経験もない私が担当しているから、彼女がしんどいのではないかな？私じゃなかったら・・・」というふうに不安が募っていった。最初は「なんでこんなことするんだろう？これはどういう意味だろう？」と1つ1つ考えていたが、毎日それが繰り返されると苦痛でしかなくなっていった。次第とこだわりの中の意味を考えようという気持ちが薄れていった。すると、ますますこだわりが強くなり、こだわりを止めることも増え、止めることに対し彼女はさらに腹を立ててこだわるといふ悪循環になってしまった。付き合っても、付き合っても何も変わらない。彼女の気持ちを受け止めているつもりなのに何も変わらない。次第に不安や戸惑いが苛立ちに変わっていき、私の気持ちに余裕が無くなってきた。「何でこんな事をするの？」「いつまで私のことを試すの？」「いいかげんにして」という思いでいっぱいになり、本人が何を考えているのかわからなくなった。この時の私はこだわることでしか伝えられない本人の思いやつらさを感じる事より自分が本人と付き合う、向き合うことにしんどさを感じていた。

## 6 . 本人と関わる中で、自分の気持ちの変わった時

～ 私と彼女との関係における転機～

<彼女に腹を立てて受け止められなくなる>

いつものように『ジュースを買いに行く』と私を引っ張った。その日も何本もジュースを買うものの飲まなかった。私は、「また飲まないジュースを買いに行くのか・・・」と思

いながら付き合い、こだわりの中にある本人の思いを考える余裕はなかった。何度目かにジュースを買いに行った時、私がおつりをとろうとするとOさんは、「キー」という甲高い声を出して「おつりをとるな」と言った。私はその声を聞いたとたん「いいかげんにしなさい」と感情的に叱ってしまった。私が感情的になればなるほど本人も感情的になり、意地になってしまい収拾がつかなくなった。腹の立っていた私はそれ以上彼女の顔も見ることができず、他の職員に代わってもらった。そして、私は主任に「もう彼女を見ることはできません。担当を代えてください」と言ってしまった。そのままその日は彼女と向き合うことができずに終わった。

### <先輩たちとの話>

彼女が帰宅した後、先輩たちに話を聞いてもらった。それまでの私は彼女との関係で行き詰っていたことや、どうしたらいいのかわからないなどの不安な気持ちを誰かに相談することができないでいた。先輩たちは、どうして私が彼女に対して感情的になってしまったのかを聴いてくれた。私のような経験もない、何もわからない者が担当になり彼女に対して申し訳ないと思っていたこと、毎日繰り返すこだわりに付き合うしんどさとこだわる理由がわからないことに対してもどかしく思っていたこと、もっと彼女のことをわかりたい、でもどうしたらいいのかわからない中で自分が行き詰ってしまっていたこと、自分から誰かに相談する勇気もなくどうしたらいいか悩んでいたことなどを私はこの時初めて伝えた。それまで、私は「利用者に向き合うことのしんどさは皆経験することだ。自分だけがしんどいと弱音を吐いてはいけない、頑張らないと・・・」と思っていた。しかし、話を聴いてもらい、自分の思いを伝えると2人は私の事を批判することもなく、ただ「うんうん」「私も思ったことあるよ」と私の気持ちを受け入れ、共感してくれた。私の弱さも強さも全て受け入れてくれた。私は自分のことを分かってくれていたという思いで胸がいっぱいになり、泣いてしまった。人に自分の話を聴いてもらい、自分の気持ちを受け止めてもらうことがこんなに心を軽くしてくれるんだと初めて心から思えた瞬間だった。2人の先輩は私が落ち着いたのを見計らってこうも話してくれた。「正直、あなたがこんなに彼女に付き合ってくれると思っていたよ。あなたが彼女の事をなんとか分かってあげたい、わかりたいと思っている気持ちが私たちには感じ取れる。でも、あなたがこんなにもしんどいということは、彼女もあなたに気持ちが分かってもらえずもっとしんどいと思うよ。自分の気持ちが分かってもらえない、向き合ってもらえないということはあなたと同じくらい、もしかしたらそれ以上に彼女にとってもつらいことだと思うよ。あなたには言葉があって、周りの人に自分の気持ちを伝えることができる。彼女にはその手段がない。だからこだわることで伝えることしかできない。それが伝わらない時のつらい思いは今のあなたが一番わかるんじゃないかな」

私は、この時初めて自分と彼女を重ね合わせ、『私に自分の気持ちが伝わらず、苦しいんだという思いをこだわりで表現していた彼女は、それまで誰にも相談できず、1人で悩み、

苦しんでいる私と同じくらい辛かっただろうな。彼女は私が周りの人に気持ちを分かってもらいたいと思っていたように、彼女も自分の気持ちを分かかってほしい、受け止めて欲しい、向き合っていて欲しいと思っていたんだ。ただ、言葉で伝えるかこだわりで伝えるか手段が違うだけできつと思いは私と同じだったんだ』と気づいた。それまでの私はこだわりにつき合うことで表面的には彼女の思いに添っているつもりだった。「こだわり」につき合うことで彼女の思いを分かっているつもりになっていた。でも本当はこだわりを通して彼女が伝えなかった「こだわり」の中にある彼女の思いまでは汲み取ることができていなかったことに気づいた。今まで私が彼女にしていた「気持ちを受け止める」ということがどんなに表面的だったのかと深く反省した。『彼女がこだわる1つ1つにきちんと理由がある』それを肌で感じた時、本人の「こだわり」に対する考え方が変わった。“本人の「こだわり」の中に本人の気持ちがある”と心の底から思えた。そして、私が「先輩に話を聞いてもらい気持ちが分かってもらえてよかった」と思ったように、彼女にも、「私に気持ちが伝わってよかった。この人を頼りたい」と思ってもらいたいと思うようになった。

そしてまた、周りの職員が私と彼女の事をいつも気にかけていてくれた、自分一人で悩んでいないで、みんなに助けてもらいながら彼女の事を理解していければいいんだと感じ、とても心強くなった。

次の日、私は、彼女が一生懸命私に気持ちをぶつけていたのに分かってあげられていなかったこと、表面的にしか付き合っていなかったことを伝え、素直に受け止められなかったことを本当に心から謝ることが出来た。同時に、昨日はどうしたら良いか分からなかったこと、気持ちが分からなくて私もつらかったことも伝えた。その時の彼女はいつものように「キー」と声を出しながらもじっと私の目を見て、話を聞いてくれた。

## 7. その後の私と彼女

私の気持ちが変わってからもしばらくは彼女は今までと同じこだわりを繰り返していたが、私はこだわりに対して「また・・・」と思うことなく、自然とふっきれてつき合えた。そしてそれまで自分の気持ちをOさんに面と向かって話すことができなかった私は、困ることもわからないこともそれとなくはぐらかし、彼女の言うがままにつき合っていた。でも、彼女も私もわかってほしいと感じることは同じだとわかり、できないことは「できない」、わからないことは「今はわからないから、もうちょっと考えさせて」と素直に言えるようになった。

そこから彼女と私の新しい関係が始まった。ペットボトルを見つけて中身を捨てる時も、「またこだわる」と思うのではなく、「この間までは私が本当の気持ちを分からずに捨てていたからやり直してほしいという思いで捨てているのかな？」としたり、こだわる時のきっかけや様子で彼女が「何が伝えたいんだろう？付き合ってみよう！」と考えるように

なった。“こだわり”は本人の思い、主張、伝えるための手段だと思えた。すると、自然と本人に話しかけることが増えた。「何がイヤやった?」「何か気になることあった?」等、こだわりに至るきっかけや理由を探した。すると、次第に本人の行動が変わってきた。例えば、ある時他の職員との外出時、マンションのドアが開いており、彼女は「閉めに行く」と言っていたのに、一緒に居た職員に彼女の気持ちがわかってもらえず、一緒に閉めに行くことができなかった。帰ってきてから私を引っ張ってその場所まで歩いて行き、一緒にドアを閉めさせた。その後もマンションを通るたびにドアを閉めると言っていた彼女に、最初は「また閉めるのね」と思いながら表面的に付き合っていた。しかし、彼女の思いに気付いてから「あの時、ドアと一緒に閉めに行ってもらえず、私とやり直したいという気持ちなのかな?気持ちが分かってもらえなくて辛かったということを伝えているのかな?あなたの気持ちが分からなくて辛い思いをさせたね。」と言いながらマンションまで行くようになっていた。すると次第に必死になってドアまで見に行っていた彼女が、たまたま通る時に閉めるだけになり、1か月ほどすると閉めに行かなくなった。毎朝見に行っていたポットの柄も見に行かなくなったし、わざとペットボトルを探しに行くこともなくなった。1日に何度も買っていたジュースも明らかに買いに行く回数が減った。また、「トイレのふたを見に行く」と言って私を引っ張った時も、「今、私が他の利用者と話をしていたからトイレを見に行くって言うの?次は私に付き合ってよ!って言ってるの?」と訊くと彼女の気持ちと合っていたようで「もういいよ」と見に行かずに途中でやめた。私はこだわる時のきっかけ、前後関係、周りの状況で理由を読みとることができる、本人にその時の彼女の思いを細かく確認していくようにした。すると、彼女は「分かってもらえたのならこだわらなくていいや・・・」と思えることが増え、“こだわり”で引っ張るのではなく視線や表情で伝わるが増えた。

気が付けば次々と“こだわり”は減っていき、表面的には缶を拾ったり、ペットボトルを気にするなどの同じ行動をしても「あなたが離れている間、頑張ってるよ。だから2人でゆっくり話をしたいんだ」とか「他の人ばかり見ていないで私の事も見てね」など「一緒に居たい」、「そばにきてほしい」などの要求表現の一つになっていた。それも今では、目で私の姿を追いながら声で呼ぶ、側にくる等の直接的な表現に変わってきている。

## 8. 私の中で何が変わったのか

彼女と出会ってから、彼女がこだわりを通して伝えようとしていることは何だろうと考え続けた。しかし私が自分に自信がなく、不安だったこともあり、自分に向けられた行動が本当に私を求めての行動だとは捉えられなかった。ただ、前の担当がいなくなった寂しさや、また担当が変わったことに対する腹立ちや不安をこだわりで表していると思っていた。彼女は「前の担当ではなくて、私に今の自分の気持ちを分かってほしい」と思ってい

たのだと思う。しかし表面的にしか付き合えず、本当に彼女の立場に立って、その苦しみを理解し、何とかしてあげたいという思いで考えていなかった私にはその気持ちが伝わっていなかったのだろう。

先輩に「受け止めてもらえた」という経験をしたとき、今までの私が彼女をこんなふうには「受け止めていなかった」ことに気づいた。

それまで彼女はよくくっついて、抱っこして欲しかったし、それを私は「甘えている。」「依存している」と捉えていた。又、私も彼女の甘えを受け入れていると思っていたが、そのどちらかが頭で考えていただけだったと理解できた。

先輩たちに自分の事を受け止めてもらい、私が『人に依存する、甘える』ということがどういうことかを身をもって体感した時、初めて彼女が『人に甘えたい・頼りたい』という気持ちをこだわりで表現していると実感できた。

そして、「彼女は私に気持ちを分かってほしいと思っている。他の誰かではなく私に伝えているんだ。だから、何があっても私が1番に彼女の理解者になってやる」と覚悟をして彼女と真正面から向き合おうと思えるようになった。

このことが自分自身の一番大きなターニングポイントだったと思う。正面から向き合おうと思った時、これまでのこだわりへのつきあいが本当に表面的なものだと分かったし、彼女の本当の気持ちが分かれば、必ずしもこだわりそのものを受け入れなくてもいい、と実感できるようになった。

彼女が行動で表してくる様々な思いを理解して上げられない時も多いが、正面から向き合うという気持ちを大切に、これからもかかわっていきたい。